

2020年7月31日 Vol.163

2番底形成の気配漂う株式相場

世界の感染者数が1600万人、死亡者数も65万人を超えるなど引き続きコロナ禍は広がりを見せている。この結果、経済にも影響をもたらした先進国、とりわけ米国では4-6月期の実質GDPの伸び率が年率換算で過去最悪のおよそ33%減となると伝えられ大統領選を控えた同国経済に暗雲が立ち込めている。こうした最悪の状態は7-9月には多少持ち直すとの期待はあっても感染状況からはまだ低迷状態が続くという見方が有力と言える。対する隣国の中国は虚偽に満ちた統計データであり当てにはならないが、同時期の実質GDPが前年同期比3.2%増とされ、1Qのマイナス6.8%から急回復を示した。コロナ感染の流行の時期の違いで統計データにも違いが見られるが、このところの大洪水発生で実際の中国の景気がこれほど良いとは思えない。コロナ禍でリーマンショック級の景気後退が世界的に起きていることに疑いの余地はない。

この中で株式相場は3月のボトムから6月にかけて戻り相場を展開。意外な強さが見られる背景としては政策当局による異次元の金融緩和や様々な個人や企業への支援などを含めた景気対策に求められている。米国市場に連動しがちな日本の株式相場も日経平均が6月上旬には2万3000円台まで上昇していたが、その後は調整含み。2か月近い調整の中で、良く言えば2万2000円台固めの展開が見られたのだが、さすがにPCR検査数の増加につれて陽性者数が過去最高の数になるに及んで再び経済への影響が懸念され、株式市場にも先行きへの不安感が投資マインドにも表れ始めている。理想的にはこの水準をキープしながら、次の上昇を待つスタンスで臨みたいところだが、現実の世界での不安が3月の安値に対する2番底形成を予見させる展開になりつつある。ファーウェイなど中国共産党とのつながりが憂慮される中国の有力企業を排除したり、お互いの総領事館を閉鎖させるなど米中の覇権争いが、ますますエスカレートする中で世界経済の先行きもまだまだ不透明だという状況ではポジティブな買い意欲は高まらない。多くの投資家はまた訪れようとしている比較的大きな調整相場を想定しているのか、上値を追う動きはほとんどない。

こうした調整ムード漂う中で本日マザーズに上場を果たした産業のデジタルイノベーション推進企業のSun Asterisk(4053・公開価格700円、初値1209円)と不動産向けソフトウェアサービスの提供を行う日本情報クリエイト(4054・公開価格1300円、初値2210円)は、前場中に寄り付くなど比較的健康な初値形成が見られた。6月以降のIPOは初値が公開価格の2倍以上、中には9倍という水準でスタートするなど過熱気味だっただけに調整気味の株式市場の先行きを懸念してのこれらの銘柄の健康な始まりを投資家の皆様はどう見ておられるでしょうか。8月の意欲的なビジネス展開を行うIPO銘柄もこうした健康なスタートとなるのか引き続き今後のIPO市場動向を冷静に見守りたいところだ。

(東京IPOコラムニスト 松尾範久)